富山県八尾の町でもっとも
古い建物といわれる「宮田旅館」。
築300年くらいと推定される。
床下の傷みがひどくて
建物が傾き、一昨年、当主が
島崎棟梁に建て替えの相談を
もちかけたところ、
「新築ならいつでもできる。
これだけ歴史のある、価値ある
建物なのだから活かしては」と
逆に提案され、見事に再生された。
囲炉裏端に座って見上げると、
幾重にも交差した梁が見事。
井桁に組んだ梁は揺れを吸収し、
地震にも強いという。
「宮田旅館」
富山県婦負(ふい)郡八尾町西町2267
☎076-455-2011

文=舟橋左斗子 Text/Satoko Funahashi　写真=油科康司 Photo/Yasuji Yushina (WPP)

富山県八尾の町を元気にさせた島崎英雄の仕事

古民家と生きる棟梁

「何で今ごろ、こんな古くさいもん建ててるんだ?」。人は不思議そうな面持ちで訊いた。日本中から、ここ富山県八尾(やつお)の町並みからも、伝統的日本家屋が姿を消し、ぴかぴかの新建材で町が彩られていった高度経済成長期。こつこつと伝統工法で木の家を造り続ける若い大工の棟梁、島崎英雄さんは異色の存在だった。今では全国的に有名な『おわら風の盆』も地方の小さな祭りにすぎなかった。「伝統を守りたい」と思ったわけでもない。チャレンジ精神旺盛な若者だったから、かえって人より早く近代工法にも携わった。某大手住宅メーカーの講習会にも参加した。「くだらねえな」「そうだな」。一緒に参加した弟と交わしたひと言が、その後の人生をしばらくは辛いものにした。島崎さんが『古民家再生』の仕事に本格的に出合ったのは30歳を過ぎた頃。地元の名士、吉田桂介氏からの依頼だった。それまでも、家を建て替えるとき、床の下地ならしにはよく古材を再利用したが、もとの建物に近い形で再生した経験はなかった。「ゴミの山とも見えた古材と格闘して桂樹舎「民族工芸館」ができあがり、ここから棟梁、島崎英雄の新しい人生が始まった。

空気がやわらかい。

冬の八尾の外気の冷たさは、しんしんと身体の芯に響く厳しさがある。それなのに、島崎さんの建てた家に一歩入ると、室内の空気に、何ともいえないまろやかな暖かさがあることに気づく。外断熱を徹底し、内部をエアコンやファンヒーターの風の力でかんかんに暖めた空気とはまるで違う。島崎さんの建てた家に住む皆さんは、「昔の家は天井が高いので寒いだろうと覚悟していましたが、意外に暖かくて快適なので喜んでいます」と口々に言う。

２００年前の棟梁に出合う

島崎さんは日本有数の、腕のいい大工の棟梁である。日本テレビの人気番組「ザ！鉄腕！ＤＡＳＨ！！」では、数々の難題を乗り越え古民家の移築、再生を成功させた棟梁として全国的にも有名になったが、もともとは、15 歳の時、当時としてはごく普通に大工の棟梁に弟子入りし、他の同世代の大工だちと同様に伝統工法を学んだ若者だった。構造部分に釘や金物を一切便わない『木組み』の技術は、美しいばかりでなく、木を傷めず、何百年という耐久性をも与えてくれるが、木により、家の形や大きさにより、組み方を変えなければならない難しさがある。そのため、知恵も腕も熟練も必要である。伝統工法では、木は空気に触れられるようむき出しのまま使われるが、構造が目に触れない近代工法は接合部に美しさは必要なく、人工の新建材を用い、早く安く容易に造ることができたため、瞬く間に日本中に広まった。世界でも類を見ないといわれる日本の大工の卓越した『技』を置き去りにして走り出し、バブルな富を産み続けた時代の中で、島崎さんはただ、走らなかったのである。

古民家の再生は、前述の吉田氏の仕事を契機として少しずつ依頼が来るようになるが、再生ばかりを手がけてきたわけでも手がけたいと思ったわけでもない。島崎さんには、再生であれ、一部再利用であれ、完全な新材での新築であれ、仕事としては同じこと。ただ、『木という素材』が好きでたまらない島崎さんにとって、今ではまず手に入らないような太い欅の柱や根曲がりの松の梁は実に魅惑的なものだった。２００年前に建てられたという家を解体すると、建てる時点でそれ以前の家を再利用したものだとわかることがよくある。「そうすると４００～５００年前のうちってことだちゃね？」。それはちょっとした感動である。また、『解体』という作業の中で、学ぶことはとても多い。何百年も前の棟梁の技と知恵に出合うほどに、自分のつたなさを知り、２００年前の棟梁が梁の裏に刻んだ名前を見ると、とても自分には書けないと思ってきたという。「そんな……」とその謙虚さに言葉を失うと、「今年あたりから書こうかなと思っとるんです」と静かな笑みを返してくれた。今年、島崎さんは 60 を迎える。

1000 年経っても美しい

「わしは、人でいえば瀕死の重傷、死にかけっていう家に会うことが多いがですよ」。解体寸前、あるいはもうすでに解体に取りかかった家を、島崎さんが、誰をも、う～んとうならせる魅力的な家によみがえらせたというエピソードは数多い。ＤＡＳＨ村で再生した築

２００年の古民家も、すでに解体業者の手にあったものを交渉して譲り受けた。一人暮らしの家主が亡くなって解体予定だった家を、家主の甥っ子にあたる若い青年が「もう一度この家で暮らせないだろうか」と相談に来たこともある。見に行くと、外壁にはトタンが巻いてあるし、屋根のあちこちにすき間があいて、天井裏には光が射し込み、壁も梁も見事に汚れていた。しかし、構造はしっかりしていて、地元の松を複雑に組んだ天井の梁は、細いけれども非常に丈夫なものだとわかつた。「きれいになるよ」とアドバイスし、死の際にあった家は息を吹き返した。「まだ１００年、２００年は大丈夫」（島崎さん）。欅などは、良い状態で使ってやれば､1000 年経ってもますます美しいのだという。「自分の建てた家が、１００年、２００年経った時にまた再生されたら、最高にうれしいよ」

よみがえる町並み

八尾の町を訪れたのは、５、６年ぶりだろうか。ほんの数年で、町の印象がずいぶん変わっているのに驚いた。八尾の町なかを歩くと、タイムトリップ度はかなりいいセンをいっている。八尾らしい重厚な日本家屋が石畳の道の両側につらつらと並び、木の素材の深い色合いに、瓦屋根を支える出し梁の前面に塗られた漆喰の白が映え、町並みは実に美しく、そぞろ歩きは心をうきうきさせる。「誰が金を出してくれるわけでもないのに、町がよみがえってきた」と島崎さんは八尾の町の底力をほめる。特に近年の変化のスピードはめざましい。　昭和 30 年代、道路の拡幅に伴い、家々はセットバックさせられ、何百年も続いた町並みは、モルタルと看板の町並みに取って替わられた。その後、島崎さんが、『おわら風の盆』も踊り流す諏訪町に伝統的な町家をよみがえらせたとき、人は見向きもしなかった。人々が島崎さんの仕事に目を向け始めたのは、古田桂介氏に依頼された「民族工芸館」に続く「和紙文庫」が富山県建築百選に選ばれた頃からだ。廃校となる小学校の細長い校舎を、敷地に合わせて『コの字』型に移築再生する少々難度の高い仕事だったが、仕上がりは素晴らしく、どこか懐かしい気分にさせるこの建物に、多くの人が足を運んだ。島崎さんの手がける建物が八尾の町なかに増えるほどに、人々は伝統的な建物の『美しさ』に気づき始めた。折しも八尾の文化人たちが取り組む町づくり計画「ＨＯＰＥ計画」ともあいまって、町は変わり始めたのである。「和紙文庫は一緒にやりましたが、そのうち『島崎流』とでもいうべきものを作っていった。島崎さんのおかげで、八尾は再生の町になったと言えるでしょうねえ」（吉田桂介氏）。

新たな挑戦

　島崎さんは、伝統工法の仕事を積み重ねるうちに、アルミサッシュに変わる木製サッシュや、もみがらを壁や床板の下に使う新しい断熱（保熱）方法を開発した。冒頭で島崎さんの建てた家の中が暖かいと紹介したのは、木や土といった伝統的な素材とともに、こうした新しい工夫によって、『断熱』というより『保熱』力をより高めた結果だ。島崎さんは実に工夫の人である。木や土や紙、もみがらを使った家は、暖房を切っても２日くらいは熱が保たれているのだという。島崎さんのお話を伺っていると、元来、腕のいい棟梁というのは、伝統の技を受け継ぎながらも、そればかりに固執するのではなく、その

時代時代に求められる新しい技術をも生み出していく人たちなのだろうと感じさせられる。今、島崎工務店を訪れると、何人ものお弟子さんたちが、額に汗して『木』と向き合う姿が清々しい。仕事はこの先、３年分決まっていて、お客は順番待ちの状態だ。東京など、他府県からも仕事の依頼が来る。また島崎さんは日本初の大工を育てる専門学校、富山際職替学院の創立メンバーであり、建築実習の講師でもある。伝統工法の基礎を教え、毎年40～60名の大工の卵を送り出している。島崎さんの現在の夢は、全国に教え子たちのネットワークを作ること。まずは、島崎さんのもとで刻んだ木を各地へ運んで、現地で組み立てるような流れを作りたい。大忙しの島崎さんだが、「自分は何も変わっていない。世の中の方が変わって来ただけ」と淡々としたもの。　この頃うれしいことも増えてきた。大工が、子どもたちの『なりたい職業 No.１』になったときは、「めちゃくちゃうれしかった」。逆の時代もあったから、余計にそれがうれしい。わが子は３人とか女で跡を継いでくれなかったが、じいちゃんの作るコマが飛び抜けて強いことに感動した孫が、大工になると言い出した。お客さんから「島崎さんに建ててもらうのが『夢』だった」なんて言われると、「えー、ホントかーい」とうれしくて、頬を緩める。何てチャーミングな『棟梁』なんだろうと、話を聞くこちら側まで幸せになるひと時だった。